

霜月

〔しもつき〕 令和5年11月

秋も過ぎ去り、冷え込みもきびしくなると、霜が降りるという意味があります。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

人は即ち天下の神物なり。心神を痛ましむるなかれ。神は垂るるに祈禱を以て先とし、冥は加ふるに正直を以て本となす

伊勢二所皇大神宮御鎮座伝記

今月のことば

人は即ち天下の神物なり。心神を痛ましむるなかれ。神は垂るるに祈禱を以て先とし、冥は加ふるに正直を以て本となす

伊勢二所皇大神宮御鎮座伝記

ここに引いた御鎮座伝記は伊勢の神道五部書の一つで、大体鎌倉の伊勢の神道思想を代表したものである。最初の「人は即ち天下の神物なり。心神を痛ましむるなかれ」の句は室町時代の吉田神道にも受けつがれ、その六根清浄大祓のうちにも「天照大神の宣はく、人は即ち天下の神物なり…心神を傷ましむるなかれ」として受け継がれている。次の「神は垂るるに祈禱を以て先とし、冥は加ふるに正直を以て本となす」の句は、江戸時代の山崎闇斎の垂加社語のうちにも「神垂祈禱、冥加正直、我願くば之を守り、身を終わるまで惑ふことなからん」と語られ、彼の神道を垂加神道と称した由来が知られている。右の「人は即ち天下の神物なり」との宣言は、天下の人間はすべて、神の「みたま」を受けて、此の世に生まれてきたものであるという神道の第一の宣言である。

（続神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

鞆祭

十一月八日

火を扱う人々の祭り「ふいご祭り」

鍛冶職、鋳物師などを始め、火を用いる職業の人々が行う祭りです。たたら祭り、金山講ともよんでいます。ふいご祭りの名は、火を起こす道具の鞆から出たもので、この日は仕事を休んで注連縄を張り、赤飯や餅を供えて金山毘古神・金山毘売神等を祀ります。江戸年中行事の記録には「十一月八日のいなりふいご祭りに、鍛冶屋でみかんを投げる」とあり、稲荷神社の火焚祭の行事と結びついて受け継がれています。

新嘗

十一月二十三日

新穀を供えて収穫に感謝「新嘗祭」

新穀を神々に供え神恩に感謝する祭りです。宮中では天皇陛下が新穀を天神地祇に献って、御自らも召上りになります。

古くは日が定まっておらず、十一月の第二の卯の日を撰んで祭が行われましたが、明治六年の新暦採用の年の第二の卯の日がちょうど十一月二十三日だったことから、以後は十一月二十三日に行われることになったようです。

「酉の市」熊手が売られるようになった理由

毎年十一月の酉の日、全国各地の大鳥神社・鶯神社等で行われるお祭りで、初酉を一の酉といつて一番重視し、順に二の酉、三の酉といい、三の酉がある年は火事が多いという言い伝えがあります。これはひと月に三回も祭りが立つということ、日常生活がゆるまないよう、気を引き締める意味合いがあったと思われる。

鶯神社はもともと武運長久の神として、武士の信仰を集めていましたが、江戸時代になって祭礼の市で農機具を並べたところ、「福をかき集める」「金銀をかき集める」縁起物として、とくに熊手が人気品となりました。

さらに、お多福面、入船などの縁起物や、黄金餅という栗餅、ゆでたヤツガシラ（サトイモの一種で、「八人の頭になれる」という縁起物）なども酉の市で売られるようになり、武運長久の神としてより、商売繁盛や開運の神として、広く信仰されるようになっていきました。

しそくけんご 志操堅固

物事をしようという意志が固いこと。環境などに左右されず、志を守って変えないこと



八手（やつで）

参考文献 『日本人のしきたり』飯倉晴武（青春出版社）

令和 5 年
2023 年

11 月

日	月	火	水	木	金	土
			1 友引 る	2 先負 ね	3 仏滅 ●文化の日 明治祭 うし	4 大安 とら
5 赤口 う	6 先勝 たつ	7 友引 み	8 先負 立冬 ふいご祭 うま	9 仏滅 ひつじ	10 大安 さる	11 赤口 一粒万倍日 とり
12 先勝 一粒万倍日 いぬ	13 仏滅 三りんぼう る	14 大安 ね	15 赤口 七五三 うし	16 先勝 とら	17 友引 う	18 先負 たつ
19 仏滅 み	20 大安 うま	21 赤口 ひつじ	22 先勝 小雪 さる	23 友引 ●勤労感謝の日 新嘗祭 一粒万倍日 とり	24 先負 一粒万倍日 いぬ	25 仏滅 三りんぼう る
26 大安 ね	27 赤口 うし	28 先勝 とら	29 友引 う	30 先負 たつ		

二十四節気

【立冬】りつとう 八日

旧暦十月亥の月の正節で、これから冬に入る初めの節で、このころは陽の光も一段と弱く、日脚も目立って短くなり、冬の気配がうかがえるようになります。

【小雪】しゅうせつ 二十一日

旧暦十月亥の月の中気で、まだ市街には本格的な降雪はないものの、遠い山嶺の頂には白銀の雪が眺められ、冬の到来を目前に感じさせられます。

六曜・選日

- 〔先勝〕：諸事急ぐことによし、午後よりわるし
- 〔友引〕：朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
- 〔先負〕：諸事静かなることによし、午後大吉
- 〔仏滅〕：万事凶、患えは長びくおそれあり
- 〔大安〕：何事をするのにも吉の日、大吉日
- 〔赤口〕：諸事油断すべからず、正午のみ吉
- 《選日の吉凶》
- 〔三りんぼう〕：三隣亡日、普請始め、棟上大吉日
- 〔一粒万倍日〕：出資・投資・購入、新規事業開始、婚姻は吉、借りの、離別は凶

七十二候《11月》

小雪

初候・虹蔵不見（にじかくれてみえず）
陽の光も弱まり、虹を見かけなくなる
次候・朔風払葉（きたかせこのはきはらひ）
冷たい北風が、木々の枯れ葉を落とす
末候・橘始黄（たちばなはじめてきばむ）
橘の実が黄色く色づく

立冬

初候・山茶始開（つばきはじめてひらく）
さざんかが咲き始める
次候・地始凍（ちはじめてこおる）
大地が凍り始める
末候・金盞香（きんせんかさへ）
水仙の花が咲き始める

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

安産祈願 11月の戌の日

12日(日)
24日(金)

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《3日 文化の日》

自由と平和を愛し、文化をすすめる日です。

《23日 勤労感謝の日》

勤労をたつとび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう日です。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう

「ハレ」と「ケ」
ふだんの日と特別な日を使い分ける
昔から日本人は、ふだんとおりに日常を送る日を、「ケ(憂)」の日と呼びました。これに対して神社の祭礼や正月や節供、お盆などの年中行事、冠婚祭を行う日を「ハレ(晴れ)」の日として単調になりがちな生活に変化とケジメをつけていました。
「ハレ」のときは、日常から抜け出して特別な日を過ごします。ハレの日用の着物を着たり、神聖な食べ物である赤飯や餅を食べたり、お酒を飲んで祝ったりして、特別な日であることを示しました。
一方、「ケ」はふだんとおりの生活を送る日ですが、「ケ」の生活が順調にいかなくなることを「氣枯れ」、「つまり」「ケガレ」になるとし、とくに死や病、出産などはケガレと考えるようになりました。
日本では神話期からケガレを忌み嫌い、神様に近づくとふさわしい体になるために禊(みそぎ)をし、お祓(はら)いをしたりしました。そして、このケガレを取り除いた状態が「ハレ」だったのです。今では「ハレ」「ケ」という考え方は一般的ではなくなりましたが、ハレの日に着るという意味では、「晴れ着」や「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉が残っています。